張潮の書簡に見られる『昭代叢書』の編集状況について

小塚由博

はじめに
1．『昭代叢書』について
2．書簡に見られる『昭代叢書』の編集状況について①―作品の募集と提供―
3．書簡に見られる『昭代叢書』の編集状況について②―編集作業の實例―
おわりに

はじめに

筆者はこれまで、張潮が編纂した三種類の叢書のうち、『虞初新志』及び『檀几叢書』の編集状況について、張潮と友人との間で交わされた書簡を手がかりに考察してきた。(1) その結果、張潮が叢書を刊行する際、掲載する作品の捜索や、作品の掲載順及び掲載する叢書等の案配、また刊行した叢書の贈呈等に關する具體的な状況を窺うことができた。本稿

では殘る『昭代叢書』について同様に考察したいと思う。

1.『昭代叢書』について

①張潮と『昭代叢書』

張潮（一六五〇―一七〇九？）字は山來、號は心齋居士・三在道人。安徽歙縣（新安）の人。科擧に應ずるも落第し、後仕官の道を諦めて揚州に遷り、出版活動に力を注ぐようになった。父は進士で山東提學僉事であった張習孔で、雅號でもある詒清堂という版元を所有していた。張潮はその版元を受け繼ぎ、様々な書籍を出版している。本論で取りあげる『昭代叢書』及び『虞初新志』『檀几叢書』という三種類の叢書の編纂者としても知られ、また警句集『幽夢影』の作者としても有名である。その他、著に『心齋聊復集』『心齋詩集』『心齋雜組』『古文尤雅』『詠物詩』などがある。

張潮が編纂した『昭代叢書』は、甲集・乙集・丙集の三集が存在する。各集五十卷、各卷一作品として全五十作品。その作者はおよそ90名である。現在、丁集～癸集の七集及び別集も存在するが、これらの編者は張潮ではなく、後世の人物の手によるものである。

その代表的な作者（作品數）としては、王晫（7）、王士禎（6）、陳鼎（6）、毛先舒（6）、毛奇齡（5）、吳肅公（5）、高士奇（4）、魏禧（4）、冒襄（3）、黃周星（4）、吳陳琰（3）、閔麟嗣（3）、孔尙任（2）、尤侗（2）、余懷（2）、萬斯同（2）、王士祿（2）、閻若璩（1）、釋道忞（1）、張英（1）等である。

『昭代叢書』の收錄作品もその傾向は『檀几叢書』によく似ている。例えば、吳肅公「天官考異」「五行問」、梅文鼎「學曆說」、施璜「塾講規約」、林雲銘「讀莊子法」、徐沁「謝皐羽（翱）年譜」、黃周星「將就園記」、尤侗「外國竹

枝詞」、李仙根「安南雜記」、余懐「板橋雜記」、李沂「秋星閣詩話」、宋曹「書法約言」、冒襄「宣爐歌注」、王晫「龍經」〈以上甲集〉、閻若璩「毛朱詩說」、吳陳琰「春秋三傳異同考」、魏禧「師友行輩議」、王士禎「國朝謚號法」「琉球入太學始末」、方象瑛「封長白山記」、孔尚任「人瑞錄」、許承宣「西北水利議」、王言「連文釋義」、孔衍栻「畫訣」、林佶「漢甘泉宮瓦記」、江之蘭「醫津一筏」、高士奇「江邨草堂記」〈以上乙集〉、萬斯同「漢魏石經考」、毛奇齡「檀弓訂誤」、王轂「讀史管見」、高士奇「松亭行紀」、申涵光「荊園小語」、王仕雲「格言僅錄」、姚廷傑「戒淫錄」、閔麟嗣「古國都今郡縣合考」、徐懐祖「臺灣隨筆」、陳鼎「滇黔土司婚禮記」、毛奇齡「西河詩話」、徐釚「南州草堂詞話」、薛熙「鍊閱火器陣記」、梅庚「知我錄」、褚人獲「續蟹譜」〈以上丙集〉等多種多様である。

②テキストについて

現存する『昭代叢書』のテキストは、康熙本（張潮編）と乾隆本[2]（清・楊復吉、沈楙悳續輯、道光十三〈一八三三〉年刊〈世楷堂藏板〉）が存在する。康熙本は現存は甲集５０巻・乙集４０巻[3]で、丙集は殘本[4]である。『昭代叢書』の凡例に「茲祇以五十種爲額（この編はただ五十種を定額とします）」と示されているように、『昭代叢書』の編纂が元々各集５０作品・５０巻という方針で行われたことは間違いない。

乾隆本は形の上では甲・乙・丙集それぞれ５０巻となっているが、「出版說明[5]」および「昭代叢書合刻略例[6]」にある通り、散逸改竄が甚だしいために後人が作品の補足・變更を行っており、作品の順番・配列及び掲載作品等が康熙本の內容とは多少異なっている。ただし、乾隆本中には、本來存在していたであろう作品の題目が「原選」という形で示されており、それらを總合して原本に近い形だと推定される篇目が、卷末表１である[7]。本稿では、試みにこれに從うこととし、『昭代叢書』そのものに關する詳細な考察については紙面を代えて論ずることとしたい。

③三種の叢書の編集期間

三種の叢書について共通していることは、同時代の作者の作品をほぼリアルタイムに收集、採録している點であろう。そして、もう一つ特筆すべきは、この三種の叢書がほぼ同時期に順次編集・出版されていることであり、場合によっては叢書間で作品の移動や調整が行われていたことであろう。その編集・刊行の状況について、時系列順に簡單に示すと以下の表のようになる。

年代	『虞初新志』	『檀几叢書』	『昭代叢書』
康熙二十二〈一六八三〉年	八卷まで完成		
康熙三十四〈一六九五〉年		初集刊行	
康熙三十六〈一六九七〉年		二集刊行	甲集刊行
康熙三十七〈一六九八〉年	九卷～十二卷まで完成	餘集刊行？	
康熙三十九〈一七〇〇〉年	十三卷～二〇卷まで完成？		乙集刊行
康熙四十二〈一七〇三〉年			丙集刊行

以上のように、一六八〇年以降、一七〇三年頃にかけて立て續けに叢書が編纂・刊行されており、張潮は斷續的にその作業に追われていたことが分かる。そして、その最後に編纂・刊行されたのがこの『昭代叢書』ということができる。また、特筆すべきなのは、一六九五年から一七〇〇年にかけて『檀几叢書』（初集・二集・餘集）の編纂・刊行と『昭代叢書』（甲集・乙集）の編纂・刊行がほぼ同時期であり、後述の通り兩者の間で作品の移動が行なわれていた可能性があったことである。また、康熙三十八〈一六九九〉年の夏には、彼は知人の誣告に遭い、投獄される事件が起きている。これが叢書の編纂・刊行をより困難にさせたようであるが、[8] その事件の詳細は不明である。

④『昭代叢書』の構成

『昭代叢書』の序文・凡例は以下の通り。

『昭代叢書』甲集―張潮自序、凡例・尤侗序（康熙丁丑〈康熙三十六〔一六九七〕年〉秋日）

『昭代叢書』乙集―張潮自序（康熙庚辰〈康熙三十九〔一七〇〇〕年〉）、凡例

『昭代叢書』丙集―弟張漸と共編。張潮自序（康熙四十二〈一七〇三〉年夏五月）、凡例・張漸序（康熙四十二〈一七〇三〉年夏仲夏）

なお、『昭代叢書』各集は幾つかの帙に纏められており、甲集は六帙[9]でそれぞれ「禮」「樂」「射」「御」「書」「數」と名附けられている。乙集は「常」「富」「貴」「樂」「未」「央」の六帙、丙集は「黃」「絹」「幼」「婦」「外」「孫」「壅」「臼」の八帙となっている。

張潮は『昭代叢書』甲集の序文の中で、以下のように述べている。

僕は生まれつき世事に疎く、一つも好むところはありませんでしたが、ただ異書や祕笈はもともと好きなだけではなく、嘗てこれを集めて一編に纏めようと思い、ともに校訂・校閲しておりました。甲戌〈康熙三十三・一六九四年〉の初夏、王丹麓〈王晫〉と西子湖〈杭州西湖〉の畔でお會いした時、〈彼は〉自身が集めた『檀几叢書』を取り出したので、香を焚いて一緒に讀みました。私は寶〈『檀几叢書』〉を載せて歸り、校訂をして出版したところ、大變同人たちから賞贊を受けました。しかも我が家の竹箱に所藏しているものもまだ澤山ありました。もう少し作品を探して附け加え、更にこの叢書が完成したのです。…[10]

以上のように、『昭代叢書』編纂には、その前提として王晫と共編した『檀几叢書』の存在があり、その續編的なものがこの『昭代叢書』ということのようである。兩者の編集時期は非常に近く、或いは重なっている。

『昭代叢書』の甲集と乙集・丙集とは、多少編集方針が異なる。どちらかというと、甲集は『檀几叢書』と同様の作品を集めており、編集時期も近い。また甲集までは明代の人物の作品も掲載していたが、乙集は清代の人物に特化している。そのため、甲集に明代の人物を集中させる必要があり、作品の配置にはかなり神經を使い、王晫ら編集協力者としばしば議論を行っている。また、乙集には王士禎等清代の著名な人物の作品が數多く掲載されており、これらの人物の作品を意圖的に配置したために乙集から漏れ、次の丙集に回された作品も散見する。[11]

なお、丙集は自序に見られる通り、弟張漸の手を借りて編纂・刊行しており、丙集の自序には張漸の支援に感謝する旨述べられている。

⑤『昭代叢書』各序文・凡例に見られる編集状況

各序文及び凡例に見られる編集状況について、以下簡潔に箇條書きにしてみよう。各集の基本的な體裁等は、前集に倣っているが、各集それぞれのコンセプトや編集状況の違いが見られる。なお、その原文及び日本語譯等については、拙論[12]を參照のこと。

一. 本叢書では、一作品を一卷とし、毎集五十卷を定額とする。

二. 長文で一卷に收められない作品を掲載する場合は、節錄とする。

三. 掲載作品は、張潮がもともと捜索し所藏していたもの或いは友人より寄贈されたものが中心となっている。

四. 甲集には明朝の人物の作品が見られるが、乙集以降は昭代（清代）の人物に限定する。

五. 乙集の段階で、張潮がストックしていた作品が底を盡き、友人等から作品を寄贈してもらうことが多くなった。

六. 叢書の編纂は、營利を目的とはしていないが、實費（紙代や印刷費用など）は頂戴したい。また、支援者も募集する。

七．丙集は様々な事情から編纂作業が滞り、甲集・乙集と比べて長く編集期間を要してしまった。
八．當時多く行われていた海賊版について、各方面の知人にその對應を依頼する。
九．凡例に様々な人物の具體的な作品名を擧げて、廣く作品を捜索・收集して掲載しようとしていた。
十．續集（丁集）の編纂も計畫していた。

2．書簡に見られる『昭代叢書』の編集狀況について①—作品の募集と提供—

本論では友人が張潮に寄せた書簡を集めた『尺牘友聲集』（全十五卷。以下『友聲』と稱す）と、張潮が友人たちに寄せた書簡を集めた『尺牘友聲偶存』（全十一卷。以下『偶存』と稱す）を使用するが[13]、それぞれの内容について詳しくは拙論[14]を參照されたい。[15]

『昭代叢書』に關する記述のある書簡は、『友聲』（張潮→友人）では94通、『偶存』（友人→張潮）では90通存在する。その登場年代を見ると、『友聲』の場合最も古いのは宋曹が寄せた書簡（246・丙集・一六八九年以前）で、最も遲いのは蕭暘の書簡（1014・新集五卷・一七〇五年）であり、『偶存』の場合は、最古の書簡は吳肅公への書簡（44「與吳街南徵君」〈卷一〉・一六八〇年前後）で、最も遲いのは張庸德への書簡（441「與張紫裳」〈卷十一〉・一七〇四—五年頃）である。なお、この最古の書簡については、どちらも『昭代叢書』そのものの記述というよりかは、後に『昭代叢書』に收められる作品についての記述であり、もう少し嚴密に言うと、直接編集活動に拘わる叢書としては、『偶存』は余懷への書簡（140「復余曼翁」〈卷四〉・一六九五年）、『友聲』は王晫の書簡（583・庚集・一六九五年）以降である。なお、文末に關連表（2～4）を附したので、適宜參照されたい。

①叢書の贈呈とその依頼及び謝辭

以下、項目ごとに書簡の内容を分けて見てみよう。まずは、『昭代叢書』の贈呈もしくは贈呈の依頼とその謝禮に關する書簡である。

a．贈呈（張潮→友人）

例えば、孔尙任[16][17]、尤侗[18]、愛新覺羅岳端[19]、朱襄[20]、王士禛[21]、陳鼎[22]、沈思倫[23]、王晫[24]、毛際可[25]、張鼎望[26]、程元愃[27]、戴名世[28]、吳儀一[29]、汪洪度[30]、汪士鋐[31]、靳治荊[32]に寄せた書簡に見られる。

b．贈呈の依頼と謝辭（友人→張潮）

例えば、沈廷瑞[33]、劉長會[34]、李淦[35]、畢熙暘[36]、余蘭碩[37]、王晫[38]、陳鼎[39]、汪頴[40]、吳陳琰[41]、胡復亨[42]、王士禛[43]、王概[44]等より屆けられた書簡に見られる。

以上a・bを概觀すると、清朝の王族や役人に叢書を贈呈したり、依頼されたりするケースが目立つ。また、『檀几叢書』と『昭代叢書』を同時に提供〈受領〉する例が多く、とりわけ『檀几叢書』二集と『昭代叢書』乙集、『檀几叢書』餘集と『昭代叢書』丙集がセットになっている場合が多い。これは、それぞれの兩作品がほぼ同時期に刊行されたからであろう。

②作品の掲載及び提供の依頼とその謝辭

a．作品提供の依頼と謝辭（張潮→友人）

まずは、張潮が他者に作品の提供を依頼したり、提供を受けた際の謝辭に關する書簡を見てみよう。

例えば、吳肅公[45]、閻若璩[46]、吳陳琰[47]、狄億[48]、方象瑛[49]、釋元運[50]、王士禛[51]、趙吉士[52]、裴賡年[53]、毛奇齡[54]、張英[55]、梅庚[56]、靳治荊[57]、徐釚[58]、沈思倫[59]、高士奇[60]、王晫[61]、褚人穫[62]等に寄せた書簡に見られる。

冒丹書（一六三九―一六九五。字は青若。江蘇如皐の人）は明末清初の著名な文人である冒襄（一六一一―一六九三。字は辟彊。張潮は冒襄とも交遊有り）の息子である。彼は父冒襄の死後、何點か父の遺作を張潮の叢書に掲載するよう希望していたようで、張潮が冒丹書に寄せた書簡に「…〈冒襄の〉大著の「岕茶〈彙鈔〉」〈甲41〉及び「爐注〈宣爐歌註〉」〈甲43〉「蘭言」〈甲49〉はともに叢書二集〈『昭代叢書』甲集〉にご威光をお借り致しました。この書は來年を期日とします。今集めた作品はすでに五十種になりました」[63]とある。この三種は『昭代叢書』甲集に收められた。ここで言う「叢書二集」とは、『檀几叢書』二集のことではなく、『昭代叢書』甲集のことであろうか（乙集を指す場合もある）。

また、この冒青若の書簡と同時期の王晫への書簡に「二集〈甲集〉はすでに四十餘種となり、ご威光を大著「更定文章九命一篇」にお借りします」[64]とある。王晫の「更定文章九命」は『昭代叢書』甲集の冒頭卷一に收められている。

余懐の『板橋雜記』（甲29）の採用についても、張潮は「近々叢書の編纂があり、敢えてご威光を貴方のご著書『板橋雜記』にお借りして、集中に掲載させて頂きます。明年すぐに翻刻に回しますので、或いはご友人の雅（な作品）をお知らせ下さい」[65]とあり、更なる作品の募集を行っている。

b．作品の提供及び掲載の依頼と謝辭（友人→張潮）

これには自身の作品だけではなく、知人の作品を提供したり、掲載の依頼をしたりする場合も含まれる。例えば、王士禎[66]、尤侗[67]、江之蘭[68]、陳鼎、吳陳琰[69]、孔尚任[70]、閻若璩[71]、陸次雲、毛奇齡[72]、林佶[73]、梅庚[74]、閔麟嗣[75]、萬世標[76]等より寄せられた書簡に見られる。

陳鼎（字は定九。浙江江陰の人）が寄せた書簡に、兪長城（字は寧世）の「花甲數譜」〈乙42〉に關する書簡がある。これは桐鄉〈浙江嘉興にある〉の兪寧世先生がお作りになったものです。〈張潮〉先生は廣く奇異の作品を捜し求めており、叢書二集〈ここでは『昭代叢書』乙集のことか〉はまるで清理の技で、高く馬吊の上に出る者のようで

す。〈「花甲數譜」は〉必ず藥籠に收められるべきものです。故にご高覽下さい。[77]

その書簡の題名部分には割り注で「送花甲數譜」と記されており、陳鼎がこれを進呈したことが分かる。江之蘭が自著「醫津一筏」（乙41）を賣り込んだ事については、以前拙論[78]で述べた通りであるが、彼は幾度も張潮に書簡を寄せ、説得を試みている。結局、張潮は醫術の詳しい親族に作品を確認して貰い、その後掲載の運びとなった。

③編集の諸事情

ここでは、特に當時の著名な文人との書簡のやりとりに見られる編集事情について見てみよう。

宋犖（一六三四―一七一四。字は牧仲。河南商丘の人）は後に吏部尚書にまで出世した高官で、文章家としても高名であった。宋犖に寄せた書簡（當時彼は江蘇巡撫の任にあった）では「わたくし潮が今年編纂した『昭代叢書』は、その大要は選例中に書かれておりますので、きっとご覽下さったことと存じます。閣下には公事の餘暇に、これに序文を賜りその冒頭に飾らせて頂ければ、ほんの一文の褒稱だとしても、この上ない榮譽となりますし、片言の贈物だとしても、連城に價します」[79]と宋犖に『昭代叢書』の序文制作の依頼を行っている。ただし、現存する『昭代叢書』にはそれらしきものは見られない。

王士禛（一六三四―一七一一。字は貽上、號は漁洋山人。山東新城の人）について詳しくは拙論[80]を參照されたいが、張潮の3つの叢書全てに彼の作品が收錄されている。その內『昭代叢書』における王士禛の作品は、乙集に集中している。ここには附表1の通り六作品（乙9・12・14・22・23・24）が收められている。王士禛は言うまでも無く當時の文壇の領袖であり、張潮は彼の作品を叢書の一つの目玉と考えていた。また、王士禛も張潮の叢書編纂活動に興味を抱き、自らの作品だけではなく、兄王士祿〈乙28・36〉や友人張英〈乙40〉・門人林佶〈乙39〉張弨〈乙37・38〉の作品を叢書に掲載するよう依頼し、ほぼ希望通り掲載された。これらの書簡のやりとりは共通の友人である孔尙任の手によって

仲介・傳達された。

また書簡[81]によると、「東西二漢水辨」〈乙24〉は元々丙集に掲載する豫定であった。それは王士禎の作品をなるべく滿遍なく配置しようという意圖があったからかもしれない。しかしながら王士禎は前述のように早く叢書を刊行するよう催促しており、併せて乙集に全て作品を入れるようにも要請したのであろう。張潮はその意を汲んだのか「すみやかにあなたのご威光を借りようと思います。ちょうど〈『昭代叢書』〉乙集の編目が決定しようとしているところですが、數種類を削除して〈あなたの作品を〉入れたいと思います。〈ただしこれは〉諸同人が早くあなたの作品を見たいと思っているからであって、〈私の〉個人的な好みだけではございません[82]」と述べ、乙集に入れるように變更している。このため、高士奇の作品のように、本來は乙集に掲載されるはずだった作品のうち、その幾つかが丙集に移ることとなった。

孔尙任（一六四八―一七一八。字は季重、號は東塘。山東曲阜の人）の作品は、『昭代叢書』に「人瑞錄」〈乙13〉および「出山異數紀」〈乙18〉が收錄され、更に甥孔衍栻（字は懋法）の「畫訣」〈乙35〉も掲載されている。「人瑞錄」について、張潮は以下のように述べている。

昨年、聖駕が南巡し、天下の老人に粟帛をお與えになりました。私は先生が〈その事を〉一書に集めて、百歲の者は某省に何人、某省に何人とし、九十・八十歲の者もまた同樣に記し、名附けて「人瑞錄」とし、『昭代叢書』に掲載させて頂きたいと思っています。先日また手紙をお贈り致しましたが、今に至るまでまだ學兄よりお返事を頂戴しておりません。きっと前の手紙は〈殷〉洪喬〈手紙を途中で投げ棄ててしまった人物。『世說新語』に見られる〉に賴んでしまった〈屆かなかった〉のでしょう。今選刻した『昭代〈叢書〉』乙集は、やはり先生のご指摘を希望します。[83]

また、孔尙任は自作や甥の作品だけではなく、金德純の「旗軍志」〈乙10〉や程石麟の「鶴鶉譜」〈丙49〉の掲載も薦

めている。[84] それに對して張潮は「大著の「人瑞錄」「出山異數記」及び金素老の「旗軍志」、また「鶴鶉譜」種々、ともにご威光を拙選『〈昭代〉叢書』乙集中にお借りさせて頂きたいと思います」[85]と返信している。このほか、孔尙任は更に提供すべき作品を用意していたようであるが、作品の分量が多いこともあり張潮に寄せなかった。[86]

陸次雲・高士奇（一六四五―一七〇四）については、以前他誌[87]でも述べたが、『昭代叢書』關連の件について改めて說明しておく。陸次雲の作品は張潮の三種の叢書全てに掲載されている。彼もまた『古今文繪』等の叢書を編纂しており、作品收集のため各地に赴いていた。張潮は陸次雲の作品を自身の叢書に掲載希望する旨をしばしば書簡に記し寄せている。その際彼との連絡には地理的にも近い王晫も關與している。

更に陸次雲は高士奇とも親しく、張潮は自分に代わって高士奇の作品を入手するよう依賴していた。しかしながら、高士奇の作品は中々張潮の手元に屆かず、幾度も催促の書簡を寄せている。[88] 張潮は高士奇に書簡[89]を寄せて作品の到着を待ったが、前述の通り、閒もなく王士禎から早く叢書（乙集）を出版するよう催促があり、高士奇の作品は乙集にただ一種「江村草堂紀」〈乙43〉のみが收められることとなり、[90] 殘り（『松亭行紀』〈丙10〉、『扈從西巡日錄』〈丙11〉、『塞北小鈔』〈丙12〉）は丙集に掲載された。

萬斯同（一六三八―一七〇二。字は季野）の「漢魏石經考」〈乙1〉と「唐宋石經考」〈乙2〉が掲載された經緯については、梅庚（字は藕長）への書簡に記載がある。

…。大著はもちろんご威光をお借りしたいと思うのですが、「石經考」は卷帙がとても多く、もし原則に照らせば上・下卷に分けるべきものですが、また以前の選例とも符合しません。もし〈上・下を〉併せて一卷とすれば百餘葉にもなってしまい、また甚だ都合が良くありません。その內容が詳細な文字の考證であることを考えれば、敢えて僭越ながら節錄する譯にも參りません。この書は誠に世閒では缺かせない書物です。計畫を變更して、別の手を

考えない譯にはいかないでしょう。竊かに考えますに、上巻を「漢魏石經考」、下巻を「唐宋石經考」と名附けたいと思います。[91]

このように本來は上・下で一冊であった作品を、苦肉の策で別作品として扱った様子が窺える。そこまでして掲載したのは、著名な文人である萬斯同の作品を何としても叢書に入れたかったからであろう。なお、萬斯同と梅庚の關係は不明である。

以上、五名の人物に關する編輯事情について簡單に見てみたが、彼らの作品やその周邊の人物の作品をなるべく採用し掲載したいと考える張潮の意圖が窺える。

3．書簡に見られる『昭代叢書』の編集狀況について②―編集作業の實例―

本節では、『昭代叢書』の編集作業の實例として王晫を中心に見てみよう。

王晫（一六三六―？。字は丹麓。浙江仁和〈杭州〉の人）については既に拙論[92]で述べている通り、當時の杭州文壇の重鎮であり、三毛〈毛奇齡・毛先序・毛際可〉・西泠十子・吳儀一・陸次雲・方象瑛等、杭州を中心に江南一帶で幅廣い交遊關係を有しており、張潮の交遊關係と重なる部分も多い。張潮編纂の叢書のうち、王晫が集めた作品は少なくない。張潮の叢書とりわけ『檀几叢書』（共編）と『昭代叢書』については、その編纂・刊行の重要なキーマンの一人であると言ってよいであろう。張潮は附表4のように王晫と多數の書簡を應酬しており（『友聲』28通、『偶存』35通）、その內容は編輯に關するものが壓倒的に多く、中でも『昭代叢書』に關する內容を含んだ書簡はおよそ『偶存』は全體の1／3、『友聲』は2／3を占める。これらの書簡を見ると、その編輯狀況の一端が浮き彫りになる。王晫は共編の

『檀几叢書』だけでは無く、『昭代叢書』についても、その作品の収集や校閲等を含めた編集作業に密接に關與していた様子を窺う事ができる。張潮の叢書編纂活動における最大の援助者と言っても過言ではない。以下、集ごとに關連書簡を見てみよう。

①甲集の編纂について

…謹んでお手紙を拝讀しますと、毎年五十種の作品を刊刻して私に託したいというお思いのようですね。書架を調べて見ると、すでに七・八種を得ております。ただし〈これらは〉誤りを訂正する必要がございます。もし來年刊刻するのであれば、きっと廣く〈作品を〉捜索して命に報じたいと思います。しかしながら、諭を被った書名ですが、昨年ご指示通りに定まりました。〈『檀几叢書』の〉前集・二集はあなたのお名前が卷首にあり、私の名はその次に入れました。或いはすべて拙著を收めてまた別友の校閲を用いるというのは最も妥當です。今『昭代叢書』と改題するというのは、至善の策ではありますが、私が愚考しますに、初集であればこの名前を用いるのは妙案です。〈しかし〉これ〈『檀几叢書』二集のことか〉を改めるとなると、きっと〈書〉坊間で刊行しても、しばらくの閒滯ることを免れないでしょう。人々がこの叢書を目にした時、きっと二集があると思うでしょう。もし舊名〈『檀几叢書』〉によって初集を購入した者は、〈『檀几叢書』〉二集があるのを聞けば、きっと買って全て揃えようとするでしょう。或いは先に〈『檀几叢書』〉二集を買う者は、きっと初集も求め、買って合璧としようとするでしょう。今別名に變えるということは、どこにもまだ知られていないことで、『檀几〈叢書〉』を所有している者は、必ずしも『昭代〈叢書〉』を購入しないでしょうし、『昭代〈叢書〉』を所有した者は、更に『檀几〈叢書〉』を探そうとしないでしょう。情勢はご覽の通りです。もし、拙作があるから嫌っているのであれば、全て採錄されて、ことごとく前集に照らして校閲して下さい。別友の姓氏を竝べるのも本當に妨げません。忝くも、相談を受けて敢えて刊行の

計畫を圖りましたが、もしあなたの意思がすでに決まっていて、刊行濟みのものが多く、削除や補足に不便なのであれば、全てあなただけでお決め下さい。三集・四集については、『昭代〈叢書〉』という名目にするのは、すぐに相談できることではありません。毎巻ただ先生がお名前を出して、別に一人で校閲し、採用した五〇作品の作者の氏名もまた必ずしも同様に竝べる必要はなく、初集・二集と別になっても構いません。あなたがどのようになさっても咎めません。我が愚考、格別なご配慮でご寛恕頂ければ幸いです。[93]

ここでは『檀几叢書』初集の次に編纂する叢書を張潮が『昭代叢書』と改題しようとしていることについて、王晫は自らの意見を述べている。ここで度々言及されている「二集」とは、文脈から考えて『檀几叢書』二集ではなく、『昭代叢書』甲集の事であろう。後述の通り『昭代叢書』は本來、昭代（清代）の作者の作品のみを收めた叢書であるはずであったが、實際は甲集にはまだ前代（明代）の作品も多數含まれている。これは手元にあった作品に明朝の人物の作品が多かったからなのかもしれない。

王晫はまた「〈黄周星の〉「將就園記」〈甲23〉及び〈沈捷の〉「增訂心相〈百二十善〉」〈甲14〉は原本を奉上します[94]」と記しており、この兩作品も王晫經由で叢書に採錄されたことが分かる。

②乙集の編纂について

張潮は王晫に「…その『昭代〈叢書〉』乙集は、それ以前の三作品とはほぼ同じではありません。前者にはまま明末の人物〈の作品〉が有りますが、今これは皆本朝の諸公の著作を入れています[95]」と說明している。また、陸次雲への書簡にも「『〈昭代〉叢書』乙集は前三選とは微妙に異なります。前者にはまま明末の人物がおります。これ〈乙集〉はすべて當代の巨匠〈の作品〉で、すでに四十種で、まだ十餘種を欲いています。あなたの所に意に適う作品がございましたら、お知らせ頂ければ幸いです[96]」と記している。

王晫はまた次のような書簡を張潮に寄せている。

〈『昭代叢書』は來年二集〈『昭代叢書』乙集〉を刊刻するのでしょうか。もし携わることがあれば、お知らせ下さい。きっと先生のために一、二種〈の作品〉を捜し求めて、〈先生の〉採擇に備えたいと思います。如何でしょう。柴虎老〈柴紹炳、字は虎臣。一六一六―一六七〇〉の著作に十九種が有りますが、ただ一枚の封面を得ただけで、まだ一字も版にしておりません。この十九種のうち、種ごとに極めて簡約にしたもの１１０枚を入手しましたが、選擇すべきものが有りません。謹んでご子息〈柴紹炳の子、柴世堂のことか〉の所より、詩文集中の記一篇を採用しましたので、ご覧下さい。彼は再三私に懇切に必ず選内に採用して欲しいと依頼しております。可否を知りませんので、私は敢えて獨斷で決めません。ご回答をお待ち致します。陸雲老〈陸次雲、字は雲士〉は江陰に縣令となって以來、鄉里〈浙江錢塘〉にお戻りになっておりません。聞くところによると、刊刻した集があるとのことですが、全てまだ寄せられておりません。顧寧老〈顧炎武、字は寧人〉の「日知錄」ですが、私の所の書坊では僅かしか有りません。私は〈杭州の？〉貢院の前〈の店？〉で見たことが有りますが、その書に掲載されているのは皆古を考え今に照らし、誤りを訂正し疑義を辨證したものです。『事物原始』〈明・徐炬編〉、『羣書備考』〈明・袁黄編〉の類も採取するのは難しいでしょう。もし必ずその書を入手したいのであれば、ぜひとも本處に求めるべきでしょう。[37]

以上のように、王晫は張潮の方針や希望に從い、『昭代叢書』に採錄すべき作品を捜索していたが、なかなかうまく入手出來なかった様子が窺える。なお、柴紹炳の十九種は、張潮が『昭代叢書』甲集の凡例で作品の原本を募集しているものの一つとして擧げている作品である。或いは王晫から情報を得ていたのかも知れない。王晫は柴紹炳と同鄉で交遊があり、その子息柴世堂とも面識があった。張潮も柴世堂と交遊があり、書簡の應酬が見られる。

また王晫は張潮に「今年〈『昭代叢書』〉乙集と〈『檀几叢書』〉餘集は結局のところどちらが先に刊刻されるのでしょ

うか、ぜひともお教えください[98]」と尋ねており、『昭代叢書』乙集と『檀几叢書』餘集がほぼ同時期に同時並行して編集され、刊行を豫定していた様子が窺える。王晫は更に「來年まず〈『昭代叢書』〉乙集を刊行するのは如何でしょう。まして『檀几叢書』はすでに二集まで有ります。『昭代〈叢書〉』はもともと先生の專選の書であり、乙集は尤も御座なりにしてはいけません。その上選定〈された作品〉はすでに三、四十種有ります。五十の數を滿たす必要があるのであれば、まだ三種ほど謹呈することは容易です[99]」と述べ、更に乙集に入れるべき作品を準備していた。

王晫は完成した『昭代叢書』乙集について、杭州方面の知人の郵送分を一手に引き受けていた様子が窺える。例えば、「この他、〈『昭代叢書』乙集〉四部は、毛大可〈奇齡〉先生・方渭仁〈象瑛〉先生・毛會侯〈奇齡〉先生及び吳寶老〈陳琰〉に送るもので、それぞれ一部ずつ代わりにお送り頂けますでしょうか[100]」とあるが、これら四人は皆『昭代叢書』に作品が掲載されている人物である。なお、毛奇齡・方象瑛の作品については、掲載された作品以外に更に作品を預かっていたが、方針にそぐわなかったり、分量が多かったりしたために、掲載は見送られた[101]。

③丙集の編纂について

丙集も作品の數が不足し、その掲載作品を探し求めるのに苦心した様子が窺える。王晫は自身の作品も含む幾つもの作品を隨時張潮の元に寄せている[102]。また、王晫は前述の通り杭州近邊の文人との繋がりが强く、續々と作品候補を張潮に寄せて紹介している。

…〈毛〉西河〈先舒〉の「大小宗通繹」「喪禮吾說篇」はすでに捜し求め、並びに「大禮議〈辨〉」「昏禮辨正」あわせて四種獻上致しましたが、丙集に採用し得る者が有りますか。…吳江の徐電老〈名は釚〉の「詞苑叢談」のうち、「本朝紀事一卷」〈「南州草堂詞話」〈丙32〉のことか〉を採用し選に入れることが許されました。お忘れ無きようお願い致します。姚廷傑の「戒淫錄」〈丙19〉はもし見本が有れば、先に一帙を印刷して頂き、閲讀させて下

さい。…唐翼修〈彪〉の「身易」〈丙29〉は丙集に掲載して頂けましたでしょうか。[103]

張潮は「…また毛蕭山〈奇齡〉の諸種及び吳舒老〈儀一〉・洪昉老〈昇〉の種々〈の作品〉を得られたことは痛快です。その内「三年喪」〈「三年服制考」〈丙7〉のことか〉の一段は、ちょうど私の考えと符合しており、もっともぴったりとします[104]」とあり、王晫から毛奇齡・吳儀一・洪昇等の作品も次々と届けられた様子が見られる。同書簡で張潮は「唐翼老〈彪〉の「身易」もまたご威光をお借りして丙集に入選させていただきますが、また定額に足りません。先生は私のためにお心に留めて下さり、感激に堪えません[105]」と述べている。更にそのすぐ後の書簡でも次のように述べている。

先の書簡で差し上げた中に、徐電發〈釚〉の「〈南州草堂〉詞話」〈丙32〉の見本と姚升老〈廷傑〉の「戒淫錄」〈丙19〉が有ります。洪昉老〈昇〉の塡詞は眞に白描の名手で、元人のお株を奪っております。もしその著『長生殿傳奇』の刻本がありましたら、一部下さるようお願い致します。[106]

更に張潮は「〈『昭代叢書』〉丙集は今すでに四十餘種の作品を得ました。高澹人〈高士奇〉先生に「金鰲退食筆記」がありますが、目下平湖へついでに行って〈受け取って〉下さる方がおりません。先生の書齋にはこの作品がお有りでしょうか。或いは所在をご存じでしょうか[107]」とする。高士奇の作品は丙集に複數掲載されており、その傳達には王晫も關與していた。なお、「金鰲退食筆記」は『昭代叢書』には收められず、吳震方編纂の叢書『說鈴』に收錄されている。また、徐釚の作品（「南州草堂詞話」〈丙32〉）も王晫が張潮に送っている。[108]

ちなみに、丙集で最後に掲載が決まった作品は靳治荊の「思舊錄」〈丙43〉だったようである。張潮が彼に寄せた書簡に、「『〈昭代〉叢書』丙集は庇護におすがりして完成致しました。しかしながら佛塔の尖塔を乘せようとしていた〈とりにしようとしていた〉時、まだその一種が足りませんでした。たまたま〈あなたの〉お手紙を拜し〈作品を頂戴

して〉定額に足りることが出来ました。この種のご縁は決してつまらないことではございません[108]」とある。靳治荊は張潮の故郷歙縣の治縣を務めていた人物である。

以上のように、張潮は王晫らの力を借りて、やっとの思いで『昭代叢書』丙集の編纂・刊行を成し逐げたのであった。

④丁集の編纂について

その他、張潮は丙集に續けて丁集の刊行を企圖していた様子が窺える。『昭代叢書』丙集の「凡例」に、

僕は己卯〈康熙三十八・一六九九年〉の歳に足を失って〈前述の投獄事件のこと〉以來、生計が苦しくなり、日に日に困窮していきました。乙集の段階で既に難儀していたので、再び叢書の編集・出版を考えませんでした。舍弟の木山〈張漸の字〉が懸命に〈編纂を〉勸めてくれたことで、作品の捜索や收集はともに行って完成しました。そこでまた叢書の編纂作業を行うこととしました。今後友人たちから大著が贈られてきたら、しばらく大切に祕藏してよい機縁があるのを待ちたいと思います。[109]

とある。

また、王晫に寄せた書簡に、「今年の二月以來、雜事が多く思い通りに行きません。丁集および「今塵談」〈張潮の作品か〉は、まだ慌ててはおりません[110]」とあり、更に他の書簡に、

貧困の餘生に、また横逆に出くわしました。思わず私の末年は、落ちぶれてここまで至りました。…丁集については、その〈叢書編纂を行う〉餘力は有りませんが、その意欲は頗る有ります。もし張生が生きていて、天の助けを得て、生活に餘裕があった場合には、きっと從事したいと思います。今現在は敢えてこのような妄想を抱きません。[111]

とある。

おわりに

以上、張潮が編纂した『昭代叢書』の編集狀況について、書簡の記述から考察を加えた。そこから張潮の叢書編纂に對する竝々ならぬ意思が見て取れるが、一方でその諸々の編集作業の煩雜さと困難さも窺える。張潮は王晫をはじめとする文人に原稿の收集や校訂を依頼し、結果として甲・乙・丙の三集150作品を編纂・刊行するに至った。

その際、他の『虞初新志』や『檀几叢書』等も同時竝行的に編纂作業を行い、場合によっては叢書間で作品をやり繰りし、それぞれの叢書のテーマを明確にしようとした。また、王士禎や閻若璩、孔尙任等の著名な人物の作品を集めて掲載し、叢書の價値を高めようと努力した。こうして完成した『昭代叢書』は同時代の文人たちに讀まれたが、後世一部が散逸してしまった。しかしながら、書簡の記述から、その原型の一端を窺うことが可能である。

これまで『虞初新志』『檀几叢書』そして『昭代叢書』の各編集狀況を書簡を通じて考察してきたが、共通しているのは張潮が書簡の傳達を通して作品をやりとりし、編集作業を行い、叢書を編纂していたことである。そのため、書簡の內容を概觀するだけでも、その編集狀況の一端を把握することが十分可能である。

本稿で書簡に見られる三種の叢書の編集狀況についての考察は一先ず完了とするが、依然として不明な點や新たな疑問が課題として殘った。今後は更に周邊資料の調査も併せて進めて張潮の編集活動の詳細を考察し、ひいては淸初における文人ネットワークの實態の一端を解明していきたい。

表1.『昭代叢書』收藏作品一覽（暫定版）

	甲集			乙集			丙集		
	作品名	著者	備考	作品名	著者	備考	作品名	著者	備考
1	更定文章九命	王晫		毛朱詩說	閻若璩		漢魏石經考	萬斯同	
2	天官考異	吳肅公		春秋三傳異同考	吳陳琰		唐宋石經考	萬斯同	
3	五行問	吳肅公		讀禮問	吳肅公		五經今文古文考	吳陳琰	
4	學歷說	梅文鼎		十六國年表	張愉曾		聖諭樂本解說	毛奇齡	
5	改元考同	吳肅公		第十一段錦	顧彩	原選	春秋日食質疑	吳守一	
6	進賢說	張能鱗		江南星野考	葉燮		檀弓訂誤	毛奇齡	
7	塾講規約	施璜		廣祀典議	吳肅公		三年服制考	毛奇齡	
8	夙興語	甘京		師友行輩議	魏禧		讀史管見	王轂	
9	家人子語	毛先舒		國朝謚法考	王士禛		乾清門奏對記	湯斌	
10	語小	毛先舒		旗軍志	金德純		松亭行紀	高士奇	
11	心病說	甘京	原選	封長白山記	方象瑛		扈從西巡日錄	高士奇	
12	日錄襍說	魏禧		琉球入太學始末	王士禛		塞北小鈔	高士奇	
13	觀宅四十吉祥相	周文煒	原選	人瑞錄	孔尚任		歷祀北嶽考	劉師峻	
14	增訂心相百二十善	沈捷	原選	迎駕紀恩錄	王士禛		聖節會約	郭存會	

15	竹溪樵述	殷曙		恩賜御書記	董文驥		荊園小語	申涵光
16	閒餘筆話	湯傳楹	原選	恭迎大駕記	徐秉義		荊園進語	申涵光
17	悟語	石龐	原選	暢春苑御試恭紀	狄億		格言僅錄	王仕雲
18	松溪子	王晫		出山異數紀	孔尚任		宗規	鍾于序
19	讀莊子法	林雲銘		奏對機緣	釋道忞		戒淫錄	姚廷傑
20	蒙養詩教	胡鼐	原選	塞程別紀	余宋		學語樵篇	沈思倫
21	謝皐羽年譜	徐沁		西北水利議	許承宣		觀物篇	石龐
22	西華仙籙	王言		廣州遊覽小志	王士禛		古國都今郡縣合考	閔麟嗣
23	將就園記	黃周星		隴蜀餘聞	王士禛		周末列國有今郡縣考	閔麟嗣
24	歙問	洪玉圖		東西二漢水辯	王士禛		黃山史槩	陳鼎
25	黃山松石譜	閔麟嗣		日錄裏言	魏禧		臺灣隨筆	徐懷祖
26	外國竹枝詞	尤侗		偶書	魏際瑞		寧古塔志	方拱乾
27	西方要紀	※2		漫堂說詩	宋犖		峒谿纖志志餘	陸次雲
28	安南雜記	李仙根		然脂集例	王士祿		滇黔土司婚禮記	陳鼎
29	板橋雜記	余懷	原選	聲韻叢說	毛先舒		身易	唐彪
30	花底拾遺	黎遂球	原選	伯子論文	魏際瑞		切字釋疑	方中履
31	十眉謠	徐士俊	原選	日錄論文	魏禧		西河詩話	毛奇齡

32	秋星閣詩話	李沂		韻問	毛先舒		南州草堂詞話	徐釚		48	荔枝譜	陳鼎		蛇譜	陳鼎	原選	吳蕈譜	吳林	
33	而菴詩話	徐增		南曲入聲客問	毛先舒		賓告	葉奕苞		47	兵仗記	王晫		畫眉筆談	陳均	原選	徐園秋花譜	吳儀一	
34	製曲枝語	黃周星		連文釋義	王言		廣錢譜	張延世	原選	46	三友棋譜	鄭晉德	原選	石友贊	王晫		百花彈詞	錢濤	原選
35	書法約言	宋曹	原選	畫訣	孔衍栻		諺說	毛先舒		45	牌譜	鄭旭旦	原選	後觀石錄	毛奇齡		瓊花志	朱顯祖	
36	戒賭文	尤侗		焦山古鼎考	王士祿		醉鄉約法	葉奕苞		44	裝潢志	周嘉胄		荔社紀事	高兆	原選	知我錄	梅庚	
37	快說續紀	王晫	原選	瘞鶴銘辨	張弨		練閱火器陣記	薛熙		43	宣爐歌註	冒襄		江邨草堂紀	高士奇		思舊錄	靳治荊	
38	庚詞	黃周星	原選	昭陵六駿贊辨	張弨		內家拳法	黃百家	原選	42	硯林	余懷		花甲數譜	俞長城	原選	文苑異稱	王晫	
39	酒社芻言	黃周星	原選	漢甘泉宮瓦記	林佶		貫虱心傳	紀鑑		41	岕茶彙鈔	冒襄		醫津一筏	江之蘭		放生會約	吳陳琰	原選
40	嬾園觴政	蔡祖庚	原選	飯有十二合說	張英		捕蝗考	陳芳生		40	嬾園觴政	蔡祖庚	原選	飯有十二合說	張英		捕蝗考	陳芳生	

50	49					
龍經	蘭言	冒襄	竹譜	陳鼎	鶴鶉譜	程石麟
		王晫	箋卉	吳菘	續蟹譜	褚人穫
						原選

※1本表は、『昭代叢書』（上海古籍出版社影印・一九九〇年）に基づき作成したが、書中に「原選」とし、「別集」に移動された作品については、一覧に加えて備考欄に「原選」と明記した。※2安文思・利類思・南懐仁等

表2.『尺牘友聲集』中の『昭代叢書』に關する書簡（各巻別）

巻數	昭代	總數	年代（西暦）	No.（指し出し人）
甲	0	97	一六八〇以前	なし
乙	0	94	一六八九以前	なし
丙	1	94	一六八九以前	246（宋曹）
丁	1	82	一六九二	318（李沂）
戊	0	85	一六九三	なし
己	0	63	一六九四	なし
庚	0	76	一六九五	583（王晫）
辛	4	59	一六九六	621（王晫）、644（沈廷瑞）、647（劉長會）
壬	13	63	一六九七	673（王晫）、688（李淦）、690（王士禎）、694（王晫）、695（王晫）、700（王士禎）、707（江之蘭）、710（江之蘭）、711（錢岳）、713（畢熙暘）、714（王晫）、715（錢岳）、

	716（余蘭碩）			
癸	726（王晫）、730（陳鼎）、739（江之蘭）、740（陳鼎）、741（陳鼎）、742（王晫）、746（汪顯）、747（陳鼎）、754（徐發）、755（陸次雲）、756（陸次雲）、758（江之蘭）、766（王晫）、767（吳蕭公）	14	52	一六九八
一	774（孔尚任）、775（王士禛）、778（閻若璩）、783（吳陳琰）、784（王晫）、788（王士禛）、790（王士禛）、792（江之蘭）、802（王晫）、803（王士禛）、804（孔尚任）、815（吳陳琰）、818（王士禛）、821（汪士鋐）、825（陸次雲）、827（王晫）、833（吳陳琰）、834（沈謙貞）	18	60	一六九九
二	844（毛奇齡）、846（王士禛）、854（沈思倫）、856（胡復亨）、857ｂ（王士禛）、858（楊文蓚）、859（潘介）、860（王晫）、867（姜實節）、878（吳陳琰）、880（毛際可）、881（毛際可）、882ｂ（王士禛）、884（趙吉士）、886（林佶）、887（梅庚）	18	55	一七〇〇
三	890（梅庚）、891（閔麟嗣）、892（閔麟嗣）、894（沈思倫）、898（孔尚任）、902（王晫）、910（張鼎望）、919（王晫）、922（王晫）、923（王晫）	10	35	一七〇一、二
四	964（萬世標）、971（王晫）、928（孔尚任）、933（靳治荊）、936（錢壽軫）、942（王晫）、946（王晫）、947（褚人穫）、948（程元愈）、957（靳治荊）、959（程元愈）	11	39	一七〇三、四
五	980（葛常夏）、981（洪天桂・何圖）、982（王晫）、992（程元愈）、1000（章大來）、1014（蕭暘）	6	55	一七〇五

※No.—拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』牘究資料編」表2の書簡通し番號

※昭代—『昭代叢書』關連の書簡數　※總數—卷全體の書簡數　※年代—推定制作年代

表3.『尺牘友聲偶存』中の『昭代叢書』に關する書簡（各巻別）

巻數	昭代	總數	年代（西暦）	No.（宛名）
一	1	55	一六八〇前後	44（吳肅公）
二	0	48	一六八九以前	なし
三	2	35	一六九五以前	108（江之蘭）、114（冒丹書）
四	4	44	一六九五	140（余懷）、153（吳肅公）、162（冒丹書）、168（王晫）
五	13	39	一六九六、七	183（宋犖）、184（孔尚任）、185（王士禛）、186（尤侗）、189（岳端）、190（朱襄）、207（王晫）、208（王士禛）、210（黃雲）、215（江之蘭）、216（王晫）、219（王士禛）、221（王晫）
六	7	30	一六九七、八	224（畢熙暘）、231（尤侗）、234（陳鼎）、238（孔尚任）、240（陸次雲）、242（王士禛）、251（閻若璩）
七	19	43	一六九九	252（吳陳琰）、253（王晫）、254（狄億）、255（王士禛）、256（孔尚任）、261（吳肅公）、263（王士禛）、265（吳肅公）、267（孔尚任）、275（王士禛）、276（孔尚任）、277（汪士鋐）、280（陸次雲）、282（吳肅公）、285（王士禛）、287（高士奇）、288（方象瑛）、291（高士奇）、293（沈思倫）、294（釋元運）
八	17	44	一七〇〇	295（嶽端）、296（王士禛）、299（趙吉士）、299b（裴賡年）、302（王士禛）、306（陸次雲）、307（毛奇齡）、308（方象瑛）、309（王晫）、312（王士禛）、316（毛際可）、317（王士禛）、318（張英）、320（梅庚）、322（張鼎望）、323（程元愈）、326（高士奇）、328（靳治荊）、329（萬斯同）、330（徐釚）、331（王晫）

九	15	42	一七〇一	339（靳治荊）、340（沈思倫）、341（高士奇）、343（王晫）、347（程元愈）、352（戴名世）、353（王晫）、359（王晫）、362（王晫）、370（褚人穫）、372（靳治荊）、374（吳義一）、376（汪洪度）、378（靳治荊）、379（孔尙任）
十	5	48	一七〇二、三	380（汪士鋐）、382（靳治荊）、383（萬世標）、407（王晫）、424（王晫）
十一	2	28	一七〇四、五	434（王晫）、441（張庸德）

No.—拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表3の書簡通し番號

表4．張潮の書簡に見られる『昭代叢書』に關する書簡の宛名（偶存）と差出人（友聲）〈五十音順〉

No.	氏名	字・號・出身	偶（總／昭）	友（總／昭）	備考
1	愛新覺羅岳端	字は正子・兼山、號は紅蘭（室）主人。河北遷安。	16／2	2／0	
2	閻若璩	字は百詩、號は潛丘。山西太原。	2／1	3／1	作者（1）—毛朱詩說〈乙1〉
3	王晫	字は安節、號は芥子園。浙江秀水。	3／0	1／1	
4	王士禎	字は貽上、號は阮亭・漁洋山人。山東新城。	18／12	12／11	作者（6）—國朝諡法考〈乙9〉、琉球入太學始末〈乙12〉、迎駕紀恩錄〈乙14〉、廣州遊覽小志〈乙22〉、隴蜀餘聞〈乙23〉、東西二漢水辯〈乙24〉

5	王晫	字は丹麓、號は木菴。浙江仁和。	35／14	28／21	作者（7）―更命文章九命〈甲1〉、松溪子〈甲18〉、快説續紀〈甲37〉、兵仗記〈甲47〉、龍經〈甲50〉、石友贊〈乙46〉、文苑異稱〈丙42〉									
6	汪洪度	字は于鼎。安徽歙縣。	2／1	0／0										
7	汪穎	字は遯漁。安徽歙縣。	0／0	1／1										
8	汪士鋐	原名徵遠、字は扶晨、號は栗亭・四顧山房。安徽歙縣。	10／2	17／2										
9	何圖	字は羲文。吉林長白。	1／0	2／1	洪天桂と連名の書簡。									
10	葛常夏	字は文度。江蘇淮安。	3／0	3／1										
11	姜實節	字は學在、號は鶴澗・仲子。山東萊陽。	5／0	9／1										
12	靳治荊	字は熊封、號は書樵・雁臣。鑲黃旗。	6／5	7／2	作者（1）―思舊錄〈丙43〉									
13	胡復亨	字は會來。湖北黃州。	0／0	2／1										
14	吳儀一	字は舒鳧。浙江杭州。	2／1	1／0	作者（1）―徐園秋花譜〈丙47〉									
15	吳肅公	字は雨若、號は晴嵒・街南。安徽宣城。	7／6	17／3	作者（5）―天官考異〈甲2〉、五行問〈甲3〉、改元考同〈甲5〉、讀禮問〈乙3〉、廣祀典議〈乙7〉									

16	吳陳琰	字は寶崖。浙江錢塘。	7／2	8／2	作者（3）―春秋三傳異同考〈乙2〉、五經今文古文考〈丙3〉、放生會約〈丙41〉
17	江之蘭	字は含徵、號は文房。安徽歙縣。	13／2	15／5	作者（1）―醫津一筏〈乙41〉
18	孔尙任	字は聘之、號は東塘。山東曲阜。	18／5	20／4	作者（2）―人瑞錄〈乙13〉、出山異數紀〈乙18〉
19	高士奇	字は澹人、號は江村。浙江錢塘。	4／4	1／0	作者（4）―江邨草堂紀〈乙43〉、松亭行紀〈丙10〉、扈從西巡日錄〈丙11〉、塞北小鈔〈丙12〉
20	洪天桂	字は秋巖。吉林長白。	1／0	1／1	何圖と連名の書簡。
21	黃雲	字は仙裳、號は舊蕉。江蘇泰州。	3／1	14／0	
22	釋元運	字は泊三、號は櫟亭。江蘇鎭江。	2／1	3／0	
23	徐釚	字は電發、號は虹亭。江蘇蘇州。	1／1	0／0	作者（1）―南州草堂詞話〈丙32〉
24	徐發	字は衮侯。江蘇蘇州。	0／0	2／1	
25	章大來	字は泰占。浙江山陰。	0／0	1／1	
26	蕭暘	字は也堂。江蘇江都。	0／0	1／1	
27	沈思倫	字は契掌、號は閑吾。安徽池州。	8／2	4／2	作者（1）―學語襍篇〈丙20〉
28	沈廷瑞	字は兆符。安徽宣城。	1／0	1／1	

29	錢岳	字は蘊生、號は十青。江蘇蘇州。	1／0	11／2	
30	錢壽軫	字は次辰。江蘇京口。	1／0	1／1	
31	沈譙貞	字は力仁、號は樂山。安徽宣城。	0／0	5／1	
32	宋曹	字は彬臣、號は射陵。江蘇盱城。	2／1	0／0	作者（1）—書法約言〈甲35〉
33	宋犖	字は牧仲、號は漫堂。河南商丘。	1／1	0／0	作者（1）—漫堂說詩〈乙27〉
34	戴名世	字は田友、號は褐夫・憂庵。安徽桐城。	4／1	0／0	
35	褚人穫	字は稼軒。號は石農。江蘇長洲。	2／1	2／0	作者（1）—續蟹譜〈丙50〉
36	張英	字は敦複、號は樂圃、諡は文端。安徽桐城。	1／1	1／0	作者（1）—飯有十二合說〈乙40〉
37	張鼎望	字は荊觀、號は冷公・渭濱。陝西涇陽。	9／1	6／2	親族。
38	張庸德	字は紫裳。江蘇江都。	3／1	4／0	
39	趙吉士	字は天羽、號は恆夫。安徽休寧。	3／1	2／2	
40	陳鼎	字は定九、號は子重・留溪。湖南黔中［浙江江陰とも］。	1／1	7／4	作者（5）—荔枝譜〈甲48〉、蛇譜〈乙48〉、竹譜〈乙49〉、黃山史槩〈丙24〉、滇黔土司婚禮記〈丙28〉
41	程元愈	字は借柳。安徽歙縣。	3／2	6／3	

42	狄億	字は立人、號は向濤。江蘇溧陽。	6／1	2／0	
43	裴賡年	不明。	1／1	0／0	
44	潘介	字は幼石。安徽皖城。	1／0	4／1	
45	梅庚	字は耦長、號は雪坪・聽山居士。安徽宣城。	2／1	4／2	作者（1）―知我錄〈丙44〉
46	萬斯同	字は季野。浙江鄞縣。	1／1	0／0	作者（2）―漢魏石經考〈丙1〉、唐宋石經考〈丙2〉
47	萬世標	字は子建。浙江寧波。	1／1	1／1	萬斯同の子。
48	畢熙暘	字は右萬、號は嵎谷。安徽歙縣。	5／1	13／1	
49	閔麟嗣	字は賓連、號は檄庵。安徽歙縣。	0／0	9／2	作者（3）―松山黃石譜〈甲25〉、古國都今郡縣合考〈丙22〉、周末列國有今郡縣考〈丙23〉
50	方象瑛	字は渭仁。浙江遂安。	2／2	1／0	作者（1）―封長白山記〈乙11〉、
51	毛奇齡	字は大可、號は西河。浙江蕭山。	2／1	1／1	作者（5）―後觀石錄〈乙45〉、聖諭樂本解說〈丙4〉、檀弓訂誤〈丙6〉、三年服制考〈丙7〉、西河詩話〈丙31〉
52	毛際可	字は會侯、號は鶴舫。浙江遂安。	3／1	5／3	

53	冒丹書	字は青若、號は卯君。江蘇如皐。	12／2	3／0	冒襄の子。父が作者（夯茶彙鈔〈甲41〉・宣爐歌註〈甲43〉・蘭言〈甲49〉）
54	尤侗	字は展成、號は悔菴・西堂老人。江蘇長洲。	3／2	5／0	作者（2）―外國竹枝詞〈甲26〉、戒賭文〈甲36〉序文制作。
55	余懐	字は澹心、號は鬘翁・廣霞。福建莆田。	8／1	14／0	作者（2）―板橋雜記〈甲29〉、硯林〈甲42〉
56	余蘭碩	字は香祖、號は少霞・湘客。福建莆田。	0／0	8／1	余懐の子。
57	楊文蓚	字は龍御。安徽歙縣。	0／0	1／1	
58	李沂	字は子化、號は艾山・壺菴。江蘇興化。	0／0	1／1	
59	李淦	字は季子、號は礪園。江蘇興化。	1／0	1／1	
60	陸次雲	字は雲士。浙江錢塘。	5／5	5／1	作者（1）―峒谿纖志志餘〈丙27〉
61	劉長會	字は與偕。山西。	0／0	1／1	
62	林佶	字は吉人、號は鹿原。福建侯官。	0／0	1／1	作者（1）―漢甘泉宮瓦記〈乙39〉

※總／虞―各人物の書簡集に收録されている書簡の總數／『昭代叢書』に關する書簡數。※作者―『昭代叢書』に作品が收録されている者。（ ）は收録作品數。ただし、甲・乙・丙集に限る。作品名下の〈 〉は所在卷數。

※參考―出身地別一覽　安徽17（歙縣8・宣城4・桐城2・池州1・休寧1・皖城1）揚州2　浙江12（錢塘3・

仁和［杭州］2・遂安2・秀水1・山陰1・鄞縣1・蕭山1・寧波1）　江蘇13（長洲2・京口2・興化2・溧陽1・泰州1・淮安1・鎮江1・蘇州1・臨城1・如皐1）　福建3（莆田2・侯官1）　山東3（新城1・萊陽1・曲阜1）　湖北黄州1　湖南黔中1［浙江江陰とも］　陝西涇陽1　河北遷安1　河南商丘1　山西太原1　吉林長白2　八旗―鑲黄旗1　不明1

注

（1）「張潮『虞初新志』の編集状況―書簡を手がかりに―」（大東文化大學『漢學會誌』五十四號・二〇一五年三月）、「張潮『檀几叢書』の編集状況―書簡を手がかりに―」（大東文化大學『漢學會誌』五十五號・二〇一六年三月）

（2）影印本として上海古籍出版社本（一九九〇年）がある。本論ではこれを使用する。

（3）日本では國立國会圖書館・國立公文書館・東洋文庫・京都大學人文科學研究所等に所藏されている。

（4）國立國会圖書館所藏。

（5）「《昭代叢書》甲、乙、丙三集有康熙三十六年（一六九七）張氏詒清堂刊本，繼有嘉慶年坊間翻板，抽添改竄甚多。楊氏丁戊庚辛五集跋文，題作「《昭代叢書五編題跋》」，有嘉慶二十三年（一八一八）刊本；沈氏輯補滙刊足本十一集，則有道光年間世楷堂刊本通行。光緒二年德清兪越曾爲撰序重印」

（6）「歙縣張山來昭代叢書甲乙丙三集、成於康熙乙亥癸未間。越七十餘年。吾邑楊慧樓先生踵輯新編・續編・廣編・續編・別編。兩公先後萃卷盈四百」云々とある。

（7）なお、本論で『昭代叢書』所収作品を提示する場合は、同表に従って「更定文章九命」〈甲1〉の如く表記することとする。

（8）これについて『昭代叢書』乙集の序文以外に複數の書簡でも言及があるが、本論では割愛する。

（9）尤侗の「昭代叢書序」に「近復纂昭代叢書六帙」とある

（10）「僕性迂拙于世事、一無所好、獨異書秘笈則不啻性命、以之嘗欲集爲一編以稽覽。甲戌初夏晤王君丹麓于西子湖頭、出所輯檀几叢書、焚香共讀。予也載寶而歸校梓行世、頗爲同人所賞。而吾家篋衍所藏尚存多種。稍加搜輯、復成是編。…」

（11）例えば、『偶存』282「寄呉寶崖」（巻七）に「乙集久已足額、大著尚存數種矣。僕他年或有恢復之期、當謀丙集之舉。大著五經今文古文考仍望見示」とあるように、この「五經今文古文考」は丙集に収められた。

(12) 前掲「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集狀況について」166〜177頁。

(13) ともに北京圖書館（北海公園古籍館）、天津圖書館、アメリカ國會圖書館等に所藏。乾隆庚子［四十五年・一七八〇］秋鐫・心齋定本・本衙藏版。本論では北京圖書館本を使用する。

(14) 「張潮の交遊關係について―『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』を手がかりに―」（『漢學會誌』五十二號・二〇一三年三月）、「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」（大東文化大學『中國學論集』三十號・二〇一二年十二月）

(15) なお前掲「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」に從って通し番號（『友聲』は表2、『偶存』は表3の通し番號）を表記する。ただし、番號の末尾に「b」が付いたものは、同資料で番號が欠落した書簡であり、後に補ったものである（その番號の後ろに入る）。

(16) 『偶存』184「寄復孔東塘主政」（卷五）「檀几叢書原與武林王丹老共事。今歲二集之役。弟去年另有昭代叢書之刻。今郵呈台政」

(17) 『偶存』379「復孔東塘」（卷九）「…并拙選叢書丙集一部・拙著四種呈敎」

(18) 『偶存』186「寄尤悔菴先生」（卷五）「今春余湘客三兄回吳、曾以奉和元旦大作二詩暨拙選昭代叢書屬其寄祝」

(19) 『偶存』189「上勤郡王啓」（卷五）「拙選昭代叢書一部恭呈」、『偶存』295「寄紅蘭主人」（卷八）「附貢徐渭畫卷一軸・拙選昭代叢書乙集一部、千祈恩諭、典籤檢入」

(20) 『偶存』190「與朱贊皇」（卷五）「拙選昭代叢書呈敎外六本并書寄上」

(21) 『偶存』317「寄王阮亭先生」（卷八）「所諭叢書四種已屬其奉寄、暈投記室」

(22) 『偶存』234「寄復陳定九」（卷六）「今寄上檀几叢書初集五部・昭代叢書五部・幽夢影四部暨凱旋詩歌。到日乞檢入」

(23) 『偶存』293「復沈契掌」（卷七）「甲乙兩集并拙刻數種附呈台政」

(24) 『偶存』309「寄王丹麓」（卷八）「昭代叢書乙集、幸已告成。今寄上一部」

(25) 『偶存』316「再復毛會府明府」（卷八）「又補奉昭代叢書甲集一部外…」

(26) 『偶存』322「答家渭濱」（卷八）「今補奉昭代叢書下酒物并三字經閱訓」

(27) 『偶存』323「與程偕柳」（卷八）「先此佈復乙集一部郵奉台覽」

(28) 『偶存』352「復戴田友」（卷九）「拙選乙集呈敎」

(29) 『偶存』374「寄呉舒鳧」（卷九）「拙選叢書乙集又舊刻清淚痕・集字詩・聯莊聯騷各一部、聊以就正有道」

(30) 『偶存』376「寄汪于鼎」（卷九）「拙選丙集、幸已告成、印出郵奉台敎」

(31)『偶存』380「復汪栗亭」(卷十)「拙選叢書内集呈教」
(32)『偶存』382「寄復寧波郡司馬靳熊封」(卷十)「…並附有新刻昭代叢書丙集一部」
(33)『友聲』644(辛集)「弟思虞初新志及昭代叢書數種、且佳刻甚富。願得縱觀」
(43)『友聲』647(辛集)「昭代叢書并求擲閲。其工價卽行賚至引領以望」
(35)『友聲』688(壬集)「所未讀者如昭代叢書・虞初新志、業承諾賜弟不日言旋。特此未領、得毋太貧之誚乎」
(36)『友聲』713(壬集)「尊刻昭代叢書未蒙賜教。然弟亦不敢求、何也。以先生曩日所賜甚多」
(37)『友聲』716(壬集)「前接手敎拜領叢書、感謝非可言盡。但僅得昭代一集、而檀几則未之見聞」
(38)『友聲』726(癸集)「捧接瑤函并拜叢書六部之惠、欣喜無量」
(39)『友聲』740(癸集)「而欲求先生之昭代檀几兩叢書者難、更僕數如王安節・龔文思・王崑繩・朱少文此數公皆当世海内大名士也。屬之再三要索此書。而藩臬兩臺幕中之王仙冠・李雲衣輾轉相托索取此書」
(40)『友聲』746(癸集)「更求大集中昭代、檀几二叢書・虞初新志・唐詩韻牌・聊復集・友聲前、後集」
(41)『友聲』833(新集卷一)「千祈惠教乙集・餘集各一部」
(42)『友聲』856(新集卷二)「但四書箋注及昭代叢書及檀几叢書二集、幸勿秘惜、思得再賜以成全錦、…」
(43)『友聲』882b(新集卷二)「昭代檀几二書計凡四集、并望薈萃全部」
(44)『友聲』942(新集卷四)「一二日間、書肆人可代呈昭代叢書甲集・檀几叢書二集、弟已覓得藏棄」
(45)『偶存』153「與呉街南徵君」(卷四)「尊著讀禮問亦借光在内、明歳方可成書也」
(46)『偶存』251「復閻百詩」(卷六)「燈事剛完、忽覩五色異光自空而下啓械。審睇則瑤札暨大著毛朱詩説也」
(47)『偶存』252「與呉寶崖」(卷七)「大作春秋三傳異同考暨攬勝圖俱欲借入選。先此布所聞云五經今文古文考、雖未親嘗異味、然一聞其名、已不勝朶頤矣。祈以副本見示爲荷」
(48)『偶存』254「寄狄立人太史」(卷七)「大著菊社約暨御試恭記二種、已經借光一載檀几餘集、一載昭代乙集。書成自當郵呈台覽也」
(49)『偶存』288「與編修方渭仁先生」(卷七)「…内欲借光大作長白山記一篇、爲拙選昭代叢書之重」
(50)『偶存』294「復泊三上人」(卷七)「…弟近刻鶴銘辯及古鼎釋文裝成五十帙、屬平山堂麗杲上人郵至焦山、以其曾卓錫、于此有因。想不久當送、到今各奉一帙呈閲。…」
(51)『偶存』296「寄大司寇王阮亭先生」(卷八)「拙選昭代叢書乙集借光大著種種、幸已成書」

(52)『偶存』299「寄趙天羽前輩」(卷八)「拙選昭代叢書乙集一部内第十三卷借光台銜校閲」
(53)『偶存』299 b「寄裴賡年編修」(卷八)「拙選一部附呈台覽。内第四十一卷藉光校閲」
(54)『偶存』307「寄毛大可検討」(卷八)「拙選昭代叢書乙集借光大著後観石錄一種。此書幸已告成、奉上一部」
(55)『偶存』318「上龍眠相公」(卷八)「…去歳大司寇王公以大著飯有十二合説郵示于潮。潮僭踰登于拙選昭代叢書之内」
(56)『偶存』320「復梅藕長孝廉」(卷八)「…得奉手敎幷大著。及石經考・江變紀略、几席生輝、拜德不淺」
(57)『偶存』328「寄寧波郡丞靳熊封」(卷八)「…領到大著、謹借光思舊錄、入拙選丙集中。俟書成郵奉台覽」
(58)『偶存』330「寄徐電發太史」(卷八)「領到老先生南州草堂詞話大集一部暨詞苑叢談一部。…内詞話中有紀本朝事一卷、俟拙選叢書内集付梓有期、自當借光爲鉛槧增重」
(59)『偶存』340「寄沈契掌」(卷九)「内學語雜篇、借入拙選叢書丙集中」
(60)『偶存』341「寄高侍郎澹人先生」(卷九)「内扈駕東巡一種、遵諭藏之筐衍、仍三種借光授梓」
(61)『偶存』343「復王丹麓」(卷九)「至文苑異稱、可與世説中賞譽一條雅稱藝林月旦、自借光入選者也」
(62)『偶存』370「寄褚稼軒」(卷九)「大著蟹譜借光選入丙集中、俟梓成郵覽」
(63)『偶存』162「復冒青若」(卷四)「…岕茶大刻暨爐注蘭言俱借光入叢書二集中。此書以明歳爲期。今所輯已將五十種矣」
(64)『偶存』168「與王丹麓」(卷四)「二集已四十餘種、借光大著更定文章九命一篇」
(65)『偶存』140「復余曼翁」(卷四)「近有叢書之輯、敢借光尊著板橋雜記、梓入集中。明歳便付棗梨、或藉以報知己之雅也」
(66)『友聲』700(壬集)「前奉寄皇華紀聞・廣州遊覽小志・蜀道驛程記三書、不知尚可節錄以入尊撰否。又先兄然脂集例亦求採取入集。其宮閨侍訪略不記刻凡例之後否」
(67)『友聲』695(壬集)「所著叢書一序附呈」
(68)『友聲』707(壬集)「弟向著醫津一筏、自謂無勳襲之陋而能闡發經旨、殊不負藥籠功名。…請亟付梓入刻入集中」
(69)『友聲』783(新集卷一)「承諭拙著三傳攷・攬勝圖附載乙集。尚未成書、尚有登科錄記・放生會約雜説二則、亦祈采入」
(70)『友聲』774(新集卷一)「又出山異數紀一卷、久呈覽。…又舍姪畫訣一卷、頗有別趣」
(71)『友聲』778(新集卷一)「…拙著毛朱詩説十數葉、與臥餘、詩非孔門舊本之説。不謀而合異哉。眞此心同、此理同也。幸亟梓入乙集中」
(72)『友聲』844(新集卷二)「…、呈聖諭樂本解説・竟山樂錄・皇言定聲錄…蠻司合誌傳共十種、統惟誨定」

(73)『友聲』886（新集卷二）「前於大司寇公處、見尊刻叢書内爲弟刻焦山鼎銘及甘泉宮瓦二種、極感厚意」

(74)『友聲』887（新集卷二）「耳前出都時、四明萬季野有石經考一小冊、擬入叢書。書最詳核、倘有意及此、仍覓便郵上前、偶置書笈附還耳」

(75)『友聲』891（新集卷三）「靳父母醉心大刻叢書、去春以思舊錄一冊、欲求收入三集」

(76)『友聲』964（新集卷五）「先君石經考一書、得附尊選…」

(77)『友聲』707（壬集）「此桐鄉兪寧世先生之所製也。先生廣搜奇異作、叢書二集、似此清理之技、高出馬吊之上者、必見收藥籠。故以奉覽」

(78)「張潮と江南文人の交流—書簡を手がかりに—」（『中國古典小説研究』十八號・二〇一四年三月）

(79)『偶存』183「上大中丞宋牧仲先生」（卷五）「潮今歲所輯昭代叢書、其大指在選例中、想賜承覽敢懇。閣下公事之餘、錫之序以冠其首、將隻字之褒、榮於華袞、片言之褒、重比連城」

(80)「張潮と王士禎の交遊關係—編集狀況を手がかりに—」（『東洋研究』第二一〇號・二〇一八年十二月）

(81)『偶存』255「寄總憲王阮亭先生」（卷七）「昭代叢書乙集今已足額。其兩漢東西水辨、存爲丙集之用」

(82)『偶存』263「寄復王阮亭先生」（卷七）「亟欲借光、因將乙集已定篇目、裁去數種以便增入。蓋欲使諸同人早睹瑯環、非特阿私所好也」

(83)『偶存』238「寄孔東塘戶部」（卷六）「…往歲、聖駕南巡、恩賜天下老人粟帛。弟欲先生輯成一書、百歲者某省若干人、某省若干人、九十・八十者亦復如之。名曰人瑞錄、載入拙選昭代叢書。曩日亦曾奉瀆、迄今未蒙兄示。當是前札悞付洪喬。今選刻昭代乙集、仍望先生特諭。…」

(84)『友聲』774（新集卷一）「…金素公旗軍志一卷、亦可備本朝八旗典故。素公苦心經學古文辭爲後來之勁不可量也。又搜得鶴鶉譜一卷、雖小品亦不俗。可補叢書之未備」

(85)『偶存』256「寄孔東塘戶部」（卷七）「大著人瑞錄・出山異數記暨金素老旗軍志、又鶴鶉譜種種、俱欲借光入拙選叢書乙集中」

(86)『友聲』804「弟尚有廣陽關三疊譜一卷・佳節承歡錄二卷、篇帙稍多。故未敢奉」

(87)前掲「張潮と江南文人の交流—書簡を手がかりに—」

(88)『偶存』280「與陸雲士」（卷七）「舍姪孫啓曾家報來、屢云、高江村先生有小品數種。屬先生見寄、迄今未能拜領。拙選昭代叢書乙集久已足額。因有高先生之説、不得不虛梨以待」

(89)『偶存』287「與高詹事澹人先生」(卷七)「尊著中尚有扈駕諸種、鄙意仍望頒示。…今敢以北墅草堂詩紀借光載入拙選昭代叢書乙集中」

(90)『偶存』306「與陸雲士」(卷八)「而都門王大司寇錄函檄促致、不獲久稽時日。是以止借光其江村草堂一種耳」

(91)『偶存』320「復梅藕長孝廉」(卷八)「…。大著自應借光、而石經考卷帙繁多、若照原式分爲上下二卷、又于以前選例不符。若併爲一卷則有百餘頁。亦殊未便。其中考文字證詳明、不敢僭爲節錄。此書乃是世間不可少之書。展轉籌畫、不得不別作裁奪。竊以、上卷名曰漢魏石經考、下卷名曰唐宋石經考。雖有割裂之嫌、然于大體無礙」

(92)「王晫とその交遊關係について」(大東文化大學『漢學會誌』五十六號・二〇一七年三月)、前掲「張潮の書簡に見られる『檀几叢書』の編集狀況について」

(93)『友聲』621(辛集)「…伏讀尊諭、意欲每年刻五十種、托弟留心。簡閱架上已得七八種。但須繕寫。如明歲果刻、當廣爲搜羅報命。然蒙諭書名、去歲承教酌定。前集・二集台銜居首弟名爲次。或可盡收拙著亦用別友校閱、此論最爲妥確。今蒙改昭代叢書、雖甚至善、愚謂、初集卽用此名爲妙。改之、于今恐于坊間行書、未免稍滯。夫人見叢書、必思有二集。若仍舊名買初集者、聞有二集。必買成全書。或先買二集者、亦必求初集、買爲合璧。今易以異名、遠近未知、則有檀几可不必定購昭代、有昭代可不必更訪檀几、勢或然也。如以拙作有嫌、凡蒙采錄、悉照前集較閱、開列別友姓氏、諒亦無妨。辱承下詢、敢以相商爲行書計、倘尊意已決、如刻成已多、不便鑿補、悉惟台裁。至于三集四集、竟顏昭代名目、便無可商。每卷只須先生出名、別用一人較閱、所用五十人姓氏亦不必雷同重列、庶與初集・二集稍別。不議高明以爲何如。狂瞽之罪、伏乞格外恕之」

(94)『友聲』583(庚集)「寄王丹麓」(卷五)「將就園記及增訂心相、將原本奉上」

(95)『偶存』221「與陸雲士」(卷六)「…其昭代乙集略與前三刻不同。前者間有明末人物、今此則盡屬本朝諸公著作」

(96)『偶存』240「叢書乙集與前三選微有不同。前者間有明末人物。此則盡屬當代巨公、已將四十種、仍欽十餘種。尊處有當意者、千祈檢示」

(97)『友聲』694(壬集)「昭代叢書不知明歲果刻二集否。倘果從事、乞示知。當再爲先生搜羅一二、以備采擇。何如。柴虎老著作有十九種、但只刻得一紙封面、並未一字付梓。卽此十九種內、每種極簡約者亦得百十張、無可擇錄。謹從令嗣處于詩文集中採記一篇呈覽。渠再三托弟致懇欲必得附入選內。不知可否、弟不敢自專。統候裁覆。陸雲老自令江陰以後、便不帰故里。聞有刻集総未見寄。顧寧老日知錄、敝處坊間絶少。弟去秋在貢院前曾見、其書所載皆考古証今、訂誤辨疑。如事物原始、羣書備考之類亦難採取。如必得其書、須從本處覓之」

(98)『友聲』726（癸集）「今年乙集・餘集畢竟孰先發刻、統乞示知」

(99)『友聲』766（癸集）「明歲先了乙集何如。況檀几已有二集。昭代原屬先生專選之書、乙集尤不可緩。且選定者已有三四十種。要足五十之數、尚易謹上三種」

(100)『偶存』309「寄王丹麓」（卷八）「…外四部送毛大可先生・方渭仁先生・毛會侯先生及吳寶老、各一部統煩代致爲荷」

(101)『友聲』827（新集卷一）「渭老意欲將集内使蜀日記、懇求入選。弟日記之類、恐不勝收。然受渭老囑托不敢不奉。…毛大老亦有連廂詞奉政、因紙板較大、不便彙封」

(102)『友聲』919（新集卷三）「偶輯文苑異稱一種、斗膽欲懇入丙集中」

(103)『友聲』922（新集卷三）「…西河大小宗通繹・喪禮吾説篇已索得、并大禮議・昏禮辨正共四種貢上、不審有可入丙集者否。…吳江徐電老詞苑叢談内、蒙許采本朝紀事一卷入選。幸勿遺忘。戒淫録如有刻樣、望先印一帙惠閲。…唐翼修身易、其可入丙集與否」

(104)『偶存』353「復王丹麓」（卷九）「…兼得毛蕭山諸種及吳舒老・洪昉老種種爲快。内三年喪一段、恰與鄙見相符、尤爲契合也」

(105)『偶存』353「復王丹麓」（卷九）「唐翼老身易亦可借光入選丙集、尚未足額。先生爲我留心、尤爲感佩」

(106)『偶存』359「與王丹麓」（卷九）「前函奉寄附有徐電翁詞話刻樣・姚升老戒淫録刻樣。亮已送到。讀洪昉老填詞、眞是白描高手、直奪元人之席。其所著長生殿傳奇、如有刻本、千祈覓一部。」

(107)『偶存』362「寄王丹麓」（卷九）「丙集今已得四十餘種。高澹人先生有金鰲退食記、一時無便人去平湖。不識先生齋頭有此否。或貴知處有此否」

(108)『偶存』331「復王丹麓」（卷八）「前月領到琅函暨虹亭徐先生二種獲之。不啻珙璧、承諭詞話内有紀本朝事一卷、可入丙集。恰與鄙見相符」、『友聲』902（新集卷三）「特以文章一部・詞苑叢談一部託弟寄政叢談中有紀事數卷内一卷皆本朝人詞話。意欲懇載尊選丙集。乞存篋衍」

(109)『偶存』378「寄靳熊封」（卷九）「叢書丙集托庇告成。然當浮屠未合尖時、尚欿一種。適拜寄書足額。此種因緣當非小可」

(110)「僕自己卯歲失足以來、生計蕭然、日就困憊。乙集已自拮据。故不復作鉛槧之想。緣舍弟木山力爲慫恿、搜輯共襄厥成。是以復有役、自後諸知交或有大著見貽、姑什襲珍藏以待機緣之至」

(111)『偶存』424「復王丹麓」（卷十）「今年二月以來事多拂意。其丁集及今塵談、尚在從容也」

(112)『偶存』434「復王丹麓」（卷十一）「貧困餘生、復遭横逆。不謂弟之末年、潦倒一至于此。…至于丁集、雖無其力頗有其心。若張

生不即就木、或叨天祐、衣食之外、稍有贏餘、仍當從事。于此若今則不敢作此痴想矣」